

2019 年度第 2 回「豊岡市地方創生戦略会議」 会議録（要旨）

- 開催日時 2019 年 9 月 24 日（火）午後 1 時 30 分～午後 4 時
- 開催場所 豊岡市役所 3 階 庁議室
- 出席委員 中貝座長、中嶋副座長、平田委員、岡本委員、朝倉委員、太田委員、佐伯委員、永田委員、西垣委員、高宮委員、宮崎委員、木村委員、
- 欠席委員 嶋委員、村瀬委員、尾崎委員、西池委員、橋本委員
- 傍 聴 9 名

1 開会

2 中貝座長（市長）あいさつ

もともと地方創生は、人口減少をどのように緩和するのか、緩和するだけでなく、緩和するための手段でもって同時にまちの有り様を質的に変えていく、2 階建ての作戦構造になっています。第 1 期の地方創生戦略で明らかになったターゲットは若い人だとして、そのためにいろんな努力を重ねてまいりました。3 年経って、さらに男女の別に着目したときに、若い女性が帰ってきていない、入っていないということが非常に大きな課題だということがわかりました。前回は、その議論がかなり集中したところです。引き続き今日も議論を重ねさせていただいて、より戦略的に、達成したい状態をより明確に規定して、実現するためのより効率的な手段を探し出すための議論を進めてまいりたいと思っています。

前回の会議で中嶋先生がおっしゃいましたように、豊岡などは、近代的な人口統計が始まって以来 100 年、一度も人口が増加に転じたことがない。他の旧市町レベルでも 70 数年とおっしゃいましたでしょうか、人口増加に転じたことがない、もう慣性の法則が働いていることになりますので、ここに抗うことは相当大変なことだと思います。

その意味では、1 つ突き抜けた確たるものを積み上げていく必要があると考えています。あるいは、ひょっとしたらもう少し穏やかなことで結果が出るかもしれませんので、引き続きいろんな角度から議論賜ればと、そんなふうに思っております。

それから、お手元にお配りした資料をご覧くださいなのですが、東京都の直近の出生率の数字は 1.20 です。豊岡市は 1.82、この差が 0.61、この 0.61 がどういう数字かというと、100 万人の女性が東京都にいる場合と、豊岡のようなまちにいる場合を単純に計算すると 61 万人の子どもの数の差が出てくることになると思います。実際には、人が移動することに伴って、出生率は変わるかもしれませんが、平面的に捉えればそう言えます。事態はどっちに動いているかというと、圧倒的に出生率の高い地方から東京のような出生率の低いところに人々が吸い取られている。従って、東京一極集中、大都市集中は確実に日本を滅ぼすという認識を持つようになっていきます。ところがその全国

最低の出生率の東京都の子どもの人口の増加をよく見てみますと、2000 年が底で右肩上がりとなっています。出生率は全国最低であるにもかかわらず、子どもの数は増えている。次のページは、社人研の調査ですが、2005 年から 2015 年の子どもの変化を見てみると、増えたのは東京都だけ。他の道府県はみんな減っています。その下に東京都における人口の男女別流入流出による人口差の推移というグラフがありますが、96 年にまず女性がほぼ収支トントンになって、97 年になると男女とも東京は転入増加になっています。今も変動はありますけれども、東京が男女とも吸収してきています。私たちが戦おうとしている現実、こういう厳しい現実です。地方にはこんな魅力があるとか、人情がいいとか、魚がおいしいだとか、いろんなことを言ってきていますが、現実には人々は地方を選ばずに東京を選んで、大都市を選んで。ここに対して私たちはどういう対抗軸を打ち立てたらいいのかということだと思っています。最後に豊岡の年齢・性別の純移動率ですけれども、ここでも改めて男女の差について見ていただきますと、相当事態は深刻であることがさらにご実感いただけると思います。この厳しい認識を一方で置きながら、でも軽やかに口笛を吹きながら、次の地方創生戦略を素晴らしいものにできていければと思っていますので、よろしくお願ひします。

3 報告事項

(1) 人口動態分析について

副座長から、人口動態について当日配付資料に基づき説明

副座長 今日では3つのお話をしようと思って、この資料を作成しました。

1つは、豊岡市の出生力の状況がどう変わってきているのかです。自然減と社会減がありまして、自然減について少し丁寧にお話しします。2つ目が社会減のほうでして、特に人口の移動、若者の移動のことですが、これは地方創生の第2期に入ってくるにあたって、その策定年、つまり今年、国からも徐々に前回なかった詳細なデータが提示され、住民基本台帳で毎年性別・年齢別、それから外国人と日本人を分けて、それから、どの市町村からどの市町村に出たり入ったりしているのかという、全国的な数字が全ての市町村に集計した上で送られてくるのが初めて行われましたので、ちょっと数字を触った部分から今までよりももう少し複雑なお話になってくることと、もう少し深刻だというお話を今日はしなければいけない覚悟です。掘り下げれば掘り下げればほど、見たくなかったことがたくさん出てきて、もう少しよかったですら、私も喜んで来られるのですが、今日は深刻なお話をこの人口のほうでしたいと思います。

それから、最後のところは少し希望と言いますか、少し楽しいお話です。前回の平田さんからのお話にもありました。私はこれがやりたくて少し突っ

込んで確認していたのですが、専門職大学が設置されることによって、将来的な豊岡の人口に対して何かインパクトがあるのかについて少し試算してみましたので、ご紹介させていただきます。この3つのお話をさせていただきます。

最初に戻っていただいて、1ページ目ですが、出生力の話です。2ページの図表1に、1985年から直近では2018年まで、このまちで1年間に生まれてきた出生数、赤ちゃんの数が示されています。かつて1985年は、1,166人生まれてきていたのですが、今、2018年は506人で、半減しています。その背景に何があるのかを今一度確認し、さらに総合的な影響力があるものなのかということ。ポイントは図表1で、黄色でハイライトしている部分です。そもそも豊岡市の中に出産年齢、出産適齢期とされる15歳から49歳の女性の人口がどれくらいで推移していったのかということ。1985年の21,000人が、今13,000人ほどに落ちてきており、3分の1ほど減っています。それから、2つ目にハイライトしている真ん中のあたりの結婚と書いてある中の1つに、15歳から49歳の「女性有配偶率」があります。これは、15歳から49歳の女性の人口の中で、どれくらいの方が実際に結婚されているのかのトレンドを出しているものです。1985年に67%ほどで、この年代に差しかかった女性はすでに結婚しておられましたが、今53%台まで下がってきています。そして、3つ目の黄色のハイライトの「出産」にあります「有配偶出生率」です。これは今まであまり使っていなかった出生率の計算の仕方ですが、いちばん右側の出生数を「結婚」の中にある「15～49歳女性有配偶者」で、実際に結婚しているお母さんたちを分母にしており、結婚していない方を除いたかたちで、すでに結婚されているお母さんたちの中で平均的にどれくらい子どもを産んでいるのかという指標で、今までの1人平均、2人平均とはちょっと異なり、1,000人のお母さんたちに対して、何人の赤ちゃんが産まれているのかになっているのですが、それがかつて81.6だったのが、今70.5に下がってきているということです。それで、最初の1ページに戻っていただいて、四角に囲っているのですが、「出生数」というのはそもそも何かということですが、お母さんたちがどれくらい人口としていて、どれくらい結婚しておられて、そして、結婚している方々が平均何人産んでいるのか、この3つを掛け合わせると、何人の赤ちゃんが産まれてくるという計算が成り立つのですが、それをちょっと言い換えると、出生数が減ってきているということは、そもそも15歳から49歳の人口が今減ってきている変化と、それから、結婚しなくなっているという変化と、それから、夫婦になったけれども、子どもを持つ平均の数が減ってきているという変化、この3つの変化が合わさって、1,100人から500人ぐらいに半減しているという

ことが起こっています。このように3つに分解されるわけです。

では豊岡で、この3つの力がどう働いているのかと言いますと、図表2の15～49歳のブルーっぽい色が、100から63に落ちており、「15～49歳女性人口」のお母さん世代になる女性の人口がだんだんと減っていることの影響の表れです。それから、少しオレンジっぽい色ですが、100から80に落ちているのが、これが結婚している数の落ちている分が影響しているのではないかと。それから、少しグレーになっている部分、夫婦になっている方の出生行動の変化の表れです。最後の3つ目の出生行動を見ていただくと、アップダウンが激しく、概ねこれは1985年を100とした数値から、上下に振れながら安定していませんが、こういう小さなまちでこのようにアップダウンするのは珍しいことではなく、若干下がっているかもしれませんが、概ねほぼ一定で、ほぼ変わっていないと見るのがよしいかと思います。いったん夫婦になれば、ある程度子どもを産むということは、この20～30年変化していないということですから。残りの2つの部分にあるというわけです。それで、オレンジが100から86、そして、ブルーが100から63で、非常に粗い計算ですけども、1,100人いたものが500人まで落ちている影響は、約3分の1ぐらいが結婚しなくなっていることの影響と、そして、3分の2がそもそものお母さんにあたる人口が落ちていることによるものという、このように理解していただけるかと思います。ですので、最も深刻なのは、もともとベースになる15～49歳の女性人口が減っていることがこのまちの赤ちゃんの数の3分の2の減少の要因がある。3分の1はいるのだけれども結婚しない、家族形成をしない、そのために子どもを産むような行動につながってこないということですから。

そして、次の話ですけども、資料1-2の労働参加と結婚ですが、もうすでに豊岡市で、ダイバーシティとかジェンダーギャップについて、取り組みを始めておられ、そのことの重要性の確認の話になりますが、図表3では、男性と女性別、それから、離婚か有配偶者か、要するに、結婚状態別に働き方、労働参加のパターンの変化があるのかをお示ししています。青が男性で赤が女性ですけども、○が付いているのが結婚している方です。△が付いているのがシングルの方です。まず、結婚している男女を見比べていただくと、昔ながらの男性は働くもの、女性は家庭に入るものということが色濃く示され、非常に根強く残っているのがおわかりになるかと思います。男性は1回結婚すると、100%近い状態でみんな働くのが当たり前となり、上のほうに貼りついているわけですが、労働参加は98%となっています。それに対して女性は、50%、60%、70%、特に20歳代後半から30歳代半ばまで、このあたりがものすごく下がっている状態になります。明らかに男性と女性の性

差によって、働く役割を分けていることがまち全体の姿として、くっきりと表れています。

次にもう1つ、同じ図からポイントとして見えるのは、△同士の比較です。男性のシングルの働き方と女性のシングルの働き方は、多少は女性のほうが低いものの、パターンはほぼ一緒です。ですので、シングルで働いている限りはこのまちでの働き方は、そんなに変わらないですが、結婚した途端に大きく分かれて違う道を行く。男性は働いて、女性は家庭に入るといって、そんな姿になっています。そして、その中身については、次の図表4・5・6・7になります。この最も大きくグリーンに塗られている部分は、フルタイム、正規で働いている方々で、左側4・5が男性、右側6・7が女性ですけれども、男性は上下、結婚している人と未婚の方を見ていただくと、未婚の男性の方のほうが結婚されている男性に比べて労働参加率が低い。経済状態がどっちかがどっちという因果関係は説明しにくく、結婚しているのだから稼がないといけないということと、稼がないと結婚もできないということが両方言えてしまうのですが。それから、シングルの男性でも非常に際立っているのが失業率の高さです。上の黄色く塗られているエリアですけれども、男性は労働参加しているといいながら、何人かに1人は実際には失業しているということで、これはちょっと深刻な状況だなと見えてきます。図表の5と図表の6、先ほどのシングル同士の比較で男女の話をしていましたが、全体的な労働参加の水準は男女シングルで似ているのですが、男女で違うのは、男性のほうが完全失業の方が高く、女性の方のほうが働きぶりとしてはむしろ好ましいような状況になっているということです。

そして、6・7の比較なのですが、ここが結婚するかしないかによって、大きくキャリアパスが変わるということで、このオレンジの部分が増えたと大きくなっているので、既婚女性、有配偶者女性のほうが家事の他に仕事をするという一方で、パートタイムなどで仕事をしてもらえる女性の方となります。

図表1にもう一度戻っていただいて、労働参加の数値を見ていただくと、豊岡市の15歳から49歳の女性労働参加率が過去に比べて、かつては60%程度だったのが今は70%、2018年ですと、たぶん71~72%ぐらいまで上がってきていると思いますが、女性の社会進出が明らかに進んできています。その一方で、先ほどの「結婚」の中のいちばん右側、黄色のハイライトした部分、67.3から53.5%に落ちてきています。きれいに労働参加率が上がってくると有配偶率が落ちていくというシーソーのような関係性が明確にあって、結局、このまちとして、数少ない帰ってきた女性たちに二者択一でどちらのコースに行きますかと。結婚するとキャリアが難しくなるというか、少

なくとも正規で働くのは難しくなるという選択肢と、結婚しない・家族形成をしない・子どもを産まないという選択肢を選んで男性のような働き方をするかという、事実上、そういった二者択一になっています。やはり、この重要性は皆さんもよくご存知で、ご理解いただいていると思いますけれども、働きやすく、そして、結婚しやすく、子どもも産みやすく、育てやすくということの本気でやらないと、この二者択一が明確に残っている状態のままで女性の社会進出が進んでいくと、有配偶率がもっとこれ以上に落ちていくことになり、先ほどの豊岡市の赤ちゃんの数が減っている3分の1の要因が、結婚行動が低迷しているからであると、ここに拍車がかかってくることは間違いないと思います。ここをなんとかしないと、という話が1つです。

2つ目の話は、人口動態です。転入・転出です。6ページと7ページは、前回の宿題のようなかたちで頂いていました、「年度ごとに見たい。5年ごとは待てない」とお話しされたことですが、かといって市町村だけの特別に設けられたいい指標はなく、国とか県レベルの中で、国や県に10指標があるとしたら、市町村は3つか4つぐらいの指標で、断片的な数字を上から下から、横からと見ながら状況を推察しなければいけない状況なのです。比較的シンプルにできるやり方として、移動平均という本当に算数のような計算をすることで、7ページの図表9を見ていただくと、いちばん上にあるのがもともと前回もこの会議に提出されていたもので、出生数・死亡数・転入数と転出数をずっとこの10年間ごと、縦に指標を見ていくのですけれども、この1年間、1年間の指標をこれぐらいの高さがあったから増えたか減ったのかやっていると、アップダウンが非常に激しくて、これは増えているのか減っているのか、もしくは政策的な効果はあるのかないのかというのは、ほとんどわからないです。これはやはりあらゆる偶然性によって、こういうことが起こるといえるのは、小さなまちでは本当に珍しいことではないので、ちょっと統計的な手法を加えることによって、その下にあるのが3年移動平均で、各3年ごとの平均を、例えば2005年から2007年、2006年から2008年、2007年から2009年と、ずっと移動しながら平均を計算していくというやり方。それから、いちばん下が5年移動平均で、5年ごとに計算したものを少しずつずらしながら、このアップダウンしているものをならしながら、トレンドをより明確に見せるものになっています。このように少し、非常にシンプルですけれども、統計的な処理をしてあげますと、見えてきますのは、我々がこれまで知っているような出生数は減り続けている、死亡数は増え続けている、減り続けて増え続けている、そのことによって自然減少はちょっとずつ拡大しているトレンド、転入に対して転出は依然として大きい。最近ちょっと転出・転入による転出超過が改善傾向にあるのではないかと、こういう

ところが見えてきます。出生数は減り続けていますね、死亡数は増え続けていますね。転入・転出のパターンは変わっていないですけども、ちょっと改善傾向があります。これを言い換えると、自然減少のほうに関しては、この創生戦略1期に入る前と入ってからとでは、明確に効果が出ているなどということを確認できません。そのまま減り続けています。そのまま増え続けているということが繰り返されているだけだろうなど見ることができます。ただ社会減のほうは、少し直近の4、5年で改善してきている様子は確かに見られます。社人研の最新の2018年3月に出てきた市町村別の将来人口推計で、豊岡市の将来的な人口移動がどう仮定されているのかを確認したのですが、ものすごく良くなるように出ているのです。ちょっとそれはないだろうと思って、また今回も使うをやめようという話をしてるんですけども、男性なんかどんどん帰ってきちゃうし、どんどん良くなっていく。先ほど一極集中が続いていて、さらに拍車がかかっていると言いながら、なぜか地方に帰る人が増えていると、これはつじつまが合わないですね。でも、一応社人研の人は全国的な数字のつじつまを合わせながら、なおかつ各市町村の推計をやるという制約の中でされていますので、そういうことが起こってしまうのかもしれませんが。ただ、転出・転入のところに関しては、確かに直近のところより少し良くなってきてはいるのですけれども、これが偶然性によってアップダウンしている、たまたま良い4、5年に差しかかっているだけなのか、それとも、少し良い基調が本当に出来上がってきて、持続性を持っているのかどうかということは、これはもう少し時間を置いて見守り、分析や検証は続けなければいけないところで、まだちょっと喜ぶのは置いていただければと思います。

ここからもう少し厳しいお話に入っていくのですけれども、2-2 住民基本台帳データと転入元・転出先をご覧ください。いろいろ数値を見る前に、8ページを最初に説明しておきたいのですけれども、3つのお話が入っています。日本人男性、要するに豊岡生まれの男性の動きの話と、豊岡生まれの女性の動きの話、そして、多分初めてこの数字をお話しすると思いますけれども、豊岡市にいる外国人、もしくは、豊岡市に出入りしている外国人のお話ということで3つです。ちょっと3つに分けて、より詳細にデータをとってみました。日本人男性について、豊岡生まれの男性の出入りの部分のところは、これまで皆さんにご説明したとおりですし、そのトレンドは非常に安定しています。10代で多くが出ていく、20代である程度帰ってくる。この行って帰ってくるという傾向は、過去から現在に関して非常に安定的で、これを良くしたいのですけれども動かない。ただ、悪くもなっていないという意味では、まあ良い知らせかというようなことです。ちょっと話がややこしく深

刻なのは、豊岡市の女性の動きでして、女性がどう動いているのかを丁寧に見てみますと、もちろん、男性と比べると、豊岡から出ていくときの水準はほぼ男女一緒です。大学とか専門学校に行くときの進学率は、男女ともほぼ一緒です。出るスタート地点は一緒です。帰ってくるときには、女性のほうが帰ってくる確率が低いということです。数少ないながらも帰ってきている人たちのピークが実は 20～24 歳ではないことがわかってきました。豊岡生まれで帰ってきている人は 20～24 歳では帰ってきていない。女性の場合、20～24 歳が転入のピークになっていなくて、実は 25～29 歳、それから、30～34 歳も数少ない女性が帰ってくる年齢ポイントになっています。その中を見てみますと、かなりの割合が但馬の中の他の市町からの転入になっています。男性の場合には、明らかに進学した後の就職で帰ってきている U ターンです。女性の場合も数少ないながらも入ってきている若い人たちは、おそらく一度但馬から出たけれども、但馬に帰ってきた後、新温泉なのか、養父なのか、周辺から豊岡に通ったりしながら仕事をしている状態で 20 代を過ごしていて、そして、そろそろ親元を離れて独立しようかなとか、結婚しようかなとか、そのときの居住拠点として、豊岡を選んでいる方が 20 代後半と 30 代前半のタイミングに移動しているようなことが見えてきました。こうなってくると、そもそも男性も女性も帰ってくる数や比率が低いですという問題にプラスして、今数少ないながらも帰ってきている人が実は但馬の中から相当来ていることになる、豊岡市よりも周辺自治体のほうが人口減少や人口動態に厳しく直面していますので、この依存ができなくなると、やがては周辺自治体から豊岡へやってきてくれる但馬の中の若い女性たちも減ってしまうと、もうこれ以上吸い尽くせないようなことになってくると、何も効果的なことをやっていなければ、これから男性はほぼ一定で保てたとしても、女性の回復率はむしろ下がっていく一方になることが起こりうることになり、ここはかなり抜本的に大胆にやらないといけないということが見えてきました。

そして、最後に外国人の話ですけれども、あまり豊岡で外国人の方に出会った気がしなかったのですけれども、数字的にはあまり無視できないことがわかってきました。今 2018 年 1 月現在で、外国人住人が約 700 人がいらっしゃいます。豊岡の約 0.8% の人口にあたります。この 700 人のうち約 300 人が技能実習生の方です。1 号・2 号・3 号といろいろな条件が分かれていますのですけれども、技能実習生で何年かの任期で来られている方々です。ほとんどがベトナム人と中国人です。非常に女性が多いです。女性が 700 人中 68%、それから、若者がほとんどで 67%。外国人の動きは、これは別に豊岡の話だけではなくて、あらゆるところで国を跨ぐとき、市町村を跨ぐとき、だいた

い動く方は、ほとんど目的は経済的なものですので、若い方に集中しています。その方々の毎年の出入りの動きを見てみますと、動いている人の男女比で言うと、男2対女が3で、インパクトとしてはほとんど転入超過に働いています。豊岡に入ってこられる方が多くて、入ってこられている中で男性が2、女性が3で多いことは、先ほど言っていました、そもそも日本人で女性で若い方の動きの中で、実は周辺自治体に頼ってという部分が将来的に心配だというお話をしましたが、実はそれだけではなくて、今我々が見ている数字の中には、ここ5年間、過去5年から過去10年ぐらいで増やしてきた技能実習生の中に相当数女性が含まれていることが、我々が見て深刻だと言っている数字に相当カウントされていることになっていますので、実は豊岡生まれで帰ってきている女性は、考えていた以上にもっと少ないということです。ちょっと数字のマジックになってしまっている状況でもあると思います。それで、少し細かい数字ですけれども、11ページから12ページ、図表13と14とを見ていただけるといいかと思います。図表13のほうは同じ数字ですけれども2018年のもの、図表の14が同じ数字ですけれども2012年のものということで、少し遡れるだけ遡って、なおかつこの地方創生の5カ年が始まる前の段階で確認できるようにと思って見た数字です。ちなみに図表13と14のところは日本人の動きだけです。ここからは外国人の数を除いて集計し直しています。それで、図表13の「転入者」、左側のほうの女性ですけれども、転入者の男女が交互に並んでいまして、それで見ていただきますと、この2018年でいうと女性が677人、この豊岡市に転入してこられているわけです。その中で50%が、ずっとランキングになっていますけれども、どの都道府県から来たのかと言えば、豊岡市の外、県内の他の市町村から来ているのが50%、大阪・京都・東京圏です。先ほど市長が東京のお話をされましたが、この豊岡と東京という2つの地域の関係性で言えば、出入りは非常に少ないです。豊岡から直接東京に出ていく人と、東京にいた人が直接豊岡に入るのは、非常に出入りは少ないです。兵庫県と大阪と京都に圧倒的に集中しています。この地域圏の中で人を送り出し、人が戻ってくる、もしくは、新たなIターンもJターンもほぼこの3県の中に集約されている状態です。このあたりで8割から9割ぐらいの説明ができてしまいます。その中でも女性は半分が兵庫県内からの転入者だということです。その兵庫県の中の内訳はどうなっているのだろうかと見ているのが下の部分です。兵庫県全体で339人ですけれども、但馬地域内ですと155人です。46%が但馬の他の市町から、54~55%が神戸や姫路などの兵庫県内の都市部から帰ってきている方になります。下の欄外に22.9%と手計算していますけれども、転入女性の約23%が但馬の他の市町からということになっているという状況です。図表14は、

2012年で、この年に758人女性は転入してきているのですが、そのうち、兵庫県が48%程度、その中で但馬の中で40%とあり、もう少し長い期間で、それから、もう少しポイントを増やしながら見ないと、偶然性に左右されている可能性もあるので、慎重に見なければいけないのですけれども、ここで言えることは、少なくとも6年の期間の中では、但馬から入ってくる女性の転入の依存度が高まっているように見えることです。豊岡市が但馬地域の中核的な都市であることは間違いないのですけれども、ここがものすごくがんばったことによって、周りからの吸収力を高めただけということになると非常に厳しいということです。このことは、もちろん市長も何度もおっしゃっていますけれども、単なる周りからの吸収力を高めるのではなくて、もっと突き抜けたかたちでこのまちの住む価値、働く価値、ここで産んで育てていくという価値、そのことによって、かなり広い広域から豊岡市を認知して、このまちへ入っていきたい、働きたいとって戻ってきてくださる方々を増やさない限りは、周辺から吸収しすぎる、その依存度を高める体質をより強化してしまうことになり、非常に危険だということです。

最後、少し楽しいお話をします。専門職大学設置の人口動態的效果です。1学年80人の定員で4学年320人の規模の大学になるということで、ちょっと変わってくるかもわかりませんが、42人の先生と職員もたぶん15人ぐらい雇われるのではないかということ、それから、前回の会議で但馬地域外から7割ぐらいは来ると、それから、卒業後、但馬地域に残って働く学生の概算が3割ぐらいあったらいいのではないかという話、これを少し参考にして、推定における仮定云々というテクニカルなところは飛ばしまして、図表16・17の結果を見ていただきたいと思います。重要なのは、2つのシナリオをどう考えて、どう仮定を置いていくのかということです。卒業生の2割が市内に就職というのと、卒業生の3割ぐらいだろうとして、ちょっと悲観シナリオと楽観シナリオを挟み込むかたちで2割と4割にしています。4割というのは相当厳しいと思いますけれど、一応希望を見せるために数字だけは計算しました。そうすると、2015年の人口に対して、2割だった場合には840人ほどプラスの効果がありますと。それをさらに2065年まで伸ばしていただくと、1,600人ほどの効果があります。それから、かなり楽観シナリオでありますけれども、4割がもし就職することが実現できてしまったら、1,200人ほどプラスになります。さらに2065年まで伸ばしていただくと、2,500人ほど増えることになります。大きいか小さいか、それぞれの方によって捉え方が違うかもしれませんが、城崎町が3,000人、但東町が4,000人で、それがいつまであるのかを考えたときに、1,000人だったり2,000人だったり維持できる、減少が抑制できることは、このまちに相当なインパクトを持つ

と思います。それから、ただ単に、総人口に対してはこれぐらいの人口ですけれども、もう1つの見方として重要なのは、このプラスになっている人口は、大学生が起点になっていますので、20代と30代のところに注入されていて、大きくなっていますので、若者が相当ここに補充されることとなります。ですので、実は、ここに表れている以上にまちの活力に与える影響は大きいと思います。ただ、これはものすごく強調しておきたいことなのですが、これはあくまでも私の試算でもって、こういった理論的に卒業生が2割とか4割とか仮定した場合には、これぐらいの数字での規模でのインパクトがありますということです。実際にやってみた結果、2040年にどういう結果で出てくるのかで決定的に重要なのは、大学を作って、その中でしっかり教育していく、それは当然皆さんがしっかりやられると思いますが、これだけでは全然ダメなのです。80人×4学年の320人をこのまちで受け入れ、その100%の320人が全く豊岡とは、但馬とは関わり合いのないところに輩出されてしまうと、ただ単に将来に向けてこのまちの人口を320人スライドしただけになってしまいます。大学ができて人材が輩出されることによって、アートな世界や観光の世界、日本社会や日本経済に対する貢献は当然ありますけれども、このまちの下心を満たすためには、そして、人口動態的な効果を見るためには、このまちが大学と一体となって就業体験をさせながら、人材の育成の貢献と一緒にやるということと、その中で、面白いじゃないか、このまちに残ってもいいじゃないか、ここからでもやってやろうという子たちが実際に定着して、そして、結婚して子どもを作ってというところにつながって初めて、この人口動態のインパクトにつながるということです。そういった一体となった状態で、学生たちを受け入れて教育をする。一緒にまちづくりや、このまちで働いていくということが実現しなければ単なるハコモノです。いかにこのまちに専門職大学が出来て、若者が300数十人入ってくるということを一体となって受け入れてやっていくのか、そのやる気度合い、本気度合いが、このプラス800人が実現できるか。それから、さらにそれを上乗せしていくのかということにもかかっていると思います。

最後、補足しておきたいのですが、これまでも少し違ってきており、重要性を増してきているなど考えていますのは、日本人と外国人を分けて考えるということ、男性と女性を分けて考えるということ、もう少しこのあたりを丁寧にやる必要性が増してきたなどという印象を強めています。日本人の男性については、比較的、安定的なパターンで動いているのですが、日本人の女性については、我々が考えていた以上に深刻なのではないかと。但馬地域に依存していたり、それから、技能実習生は女性が多いということであったり、いずれにしても今非常に厳しい状態、これからさらに厳しくな

る状態で、そのことが先ほどのいちばん最初の話に戻って行って、15歳から49歳の女性人口の減少をさらに拍車をかけていくだろうと、ここが出生数が減っていく3分の2の影響力のカウントになっていますので、社会減、自然減と、なにかもう悪夢のようなかたちになってしまうということです。

それから、大学設置のことに關しては、先ほど申し上げたとおりです。確かに、こういった理論上と言いますか、試算上の効果は明確にあります。これはすごくいい見通しとして、あるとは思いますが、これがどの辺のレベルで実際に実現できるのかは、先ほど言ったような、どれくらいこのまちが一体となって、そこに取り組むのかということにかかってくる。

最後になりますが、これまで非常にシンプルでわかりやすく便利な回復率という数字を使ってきたことがどうやらこれからは通用しなくなっていくさうだという、ちょっとやっかいな話です。日本人の動きだけを見ていくと、10代に出て20代に入ってくることなのですが、女性の中での動きで、但馬の周辺からの吸収を少し問題視してとか、それから、技能実習生の動きとか、それから、大学設置によって若者が入ってきて出ていくという、こういった新たな要素がいくつか出てくる中で、10代の減少に対する20代の増加だけではない、いくつもの要素が入ってきて、全体の指標をただ単に見ていくだけでは、どこが悪化しているのか、どこが改善してきているのかが見えにくくなってしまっていることで、おそらくもう少し将来的には、10代・20代・30代で失っている人口と10代・20代・30代で入ってきている、転入超過している、そういった3つを全体を見つつも、その内訳としての日本人男性・日本人女性、そして、外国人男性・外国人女性の動きを見ながら、どこに自分たちはターゲットを当てているつもりなのか、そこに具体的な効果は出ているのだろうか、それが全体に対してどう貢献できているのかというあたりを確認しながら進めていかなければならないと思っています。

座長 ありがとうございます。何かご質問・ご意見はございませんか。事実は事実として、謙虚に受け止めたいと思います。

 それでは次に、事務局から第2期地方創生総合戦略の素案について、説明をさせていただきます。

4 議事

(1) 第2期地方創生総合戦略（素案）について

政策調整課から資料に基づき説明

座長 それでは、先ほどの中嶋先生の報告も含めて、少しフリートーキングさせ

ていただきたいと思います。前回の戦略策定時と比べて大きく変わった点は、今、中嶋先生からもご指摘がございましたけれども、とにかく女性が帰ってきていないというところだと思います。ですので、そのところをちゃんと認識した上で、今ここで提案されている処方箋は、ジェンダーギャップがたぶん最大の要因だろうと思われるので、ジェンダーギャップを解消するための努力をする、となっています。ただ、これが本当に有効な手段なのか、他にないのかどうかは自由に議論をしていく必要があると思います。

それから、演劇のまちというのは、先ほど冒頭で申し上げましたけれども、本気で突き抜けて、より遠くの人たちからも魅力的に思ってもらえるまちをつくっていかねばいけない。その新たなエンジンとして、演劇のまちの可能性が見えてきましたので、次はこれが中心だというのではなく、これも新たなエンジンとして付け加えた上で、より遠くの人々まで射程を大きくして、そして、より効果的な魅力を作り上げていく。

それから、A戦略・B戦略の社会減と自然増減に分けると、カップルを増やして、それから1組あたりの子どもの数を増やすというのは論理的に出てきたのですが、1組の夫婦が持つ子どもの数を増やすのは、なかなか簡単ではないはずです。従って、引き続きやるのですけれども、もう地方創生の戦略からは落としてしまって、ただ、結婚したいけれどもなかなかチャンスがないという方はありますので、ここが例えば10組でも20組でも増えれば、結果が出てきますから、地方創生戦略としてはここに集中してはどうか。それで、B戦略のみで立てるにはちょっと貧弱ですので、少し無理があるかもしれませんが、前に言っていたA戦略のところのいちばん最後にくっつけたというようなことです。

さらに、今の中嶋先生の話をお聞かせすると、言わば暗いシナリオというか見通しの中で、今唯一可能性があるのが専門職大学ですけれども、その卒業生をどれだけ地元に取り込めるかということが非常に重要だというお話がありました。そうすると、そのためにはどうしたらいいのかというのは、この中にはまだ入っていませんので、そういったことも含めてここで議論していただければと思っています。

委員A 最近の大学生は、あまり貧乏学生というイメージがないので、大学が出来て、学生が遊べる場所、食べに行く場所が必要だと思いますけれども、今の豊岡にはそれが圧倒的に欠けていると思います。大学を出て、それも明確な意思を持って就職するかという子がすごく少なくて、今うちの宿でも夏の期間に2ヶ月から3ヶ月間、派遣社員を入れていますが、大学を卒業してずっと派遣で各地を転々としている子が圧倒的に多いです。その子たちに共通し

と言えるのが、自分探しをして迷っている状態です。去年遠くから来ている女の子がこっちの子と交際したのが2組あり、来月1組結婚になりました。先月、1組が豊岡市の人口を増やしました。今年も1組カップルが成立しています。城崎にどんどん入ってきている派遣の子たちを捉える方が効率いいような気がします。というのも、女の子は外に出て、結婚すると男性についていくという傾向は変えられないと思うので、豊岡から出て行った女の子を戻すよりは、よそから来ている女の子をキャッチするほうに政策を持っていったほうがいいのではないかと思います。

大学を卒業して、就職を迷う子は、居心地が良かったらそのまちで居続けるほうが強いと思うので、食事が安定して食べれたり、家賃が高くないとか、住み心地がよければ、そのまま居続けて結婚とかしてくれるのではないかと思います。

先ほど中嶋先生が、こっちで2割就職させないと大学はただの通過点になってしまうとおっしゃいましたが、観光目線から見れば、現地ですっかりとお金を学生に使ってもらうシステムを作れば、大学生が日帰りの観光客の動きをしてくれるのではないかと思います。

委員B

城崎に来ていた地域おこし協力隊の子が2人、今年こちらで結婚しました。1人は城崎の文芸館で働いていた子が城崎の旅館の方と結婚しましたし、もう1人アートセンターで働いていた子がアートセンターの人と結婚しました。考えると彼女らは3年間住んでいたのです。気に入って、出会いもあって、たぶん結婚するまでには、3ヶ月の短期間は少なく、長く居続けると、環境から人もひっくるめて、そういうこともあるのかなと思います。

先ほどの派遣の話ですけれども、私も前からそれは戦略的にしなければと思っているのですが、実は、派遣は、延長するケースもありますが、1箇所の旅館に勤めるのはだいたい3ヶ月ぐらいが基本です。城崎で働いている子でも、例えば3ヶ月招月庭で働いて、その後またうちに来る、そういう人もいますし、ひと冬やって、また違うところに行って、また帰ってくるという子もいます。トータルで1年ぐらいの長い子もいるのです。そういう人の中には、結婚する方もあります。派遣というのはその時だけで見ると、あまりあてにならない数字ではあるのですが、カニシーズンであれば、常時200~300人は城崎のまちにいると思うので、それを本当に戦略的にあてるといっても重要だと思います。

それから、外国人についても、これから環境が変わってくると思っています。ご存知のように法律が変わりまして、私のほうもこの秋、11月から中国人の女の子が2人ほど来ます。今まで台湾の子などが来ていたのですが、そ

の子は期間が短くて3ヶ月とか半年ぐらいでしたが、今回はまず1年で、1ヶ月間研修し、よければプラス2年間延長してくれる子が出てきます。これから先、たぶんいろんな旅館がどこも戦略的にやるでしょうから、外国人についてもちゃんと考えてやると、3年間でどうかはわからないですけども、少なくとも3年もいてくれると、ずいぶん状況は変わるのではないかという気もします。その間で結婚して、日本に移り住む人も出てくるでしょうから、外から入れるわかりやすい例でいくと、外国人や派遣などもちゃんと仕組みとして考えていくのも1つの手かなと思います。もちろん、専門職大学が一番大きく、我々にとっても死活問題だと思っています。本当に優秀な学生さんが来られるので、我々の受け入れ体制もしっかりして、4年間いていただきますから、その間にどれだけ多くの人にここで住みたい、働きたいと思ってもらえるかというのが最も大きな課題と思っています。そこはぜひ知恵を絞っていきたいと思っています。

委員C ちよっといくつか補足をさせていただきます。まず統計の補足で言いますと、専任教員は42名で、今のところ私が把握している限りでは、ほぼ全員が豊岡市に移住するということになっております。しかも新設の大学ですので、メインが30代、40代。子どもも連れておそらく3割から4割が家族3人以上で永住をするということ。これは非常に短期的ですけども、瞬間的に大きなインパクトになるだろうと思っています。

そして、まず皆さんに覚えておいていただきたいのですが、来月10月に入りますと、認可申請になります。これが加計学園問題の余波をかぶって、非常に厳しい状況です。ただ、公立大学なので、出せば落ちるようなことはまずないと言われているので、県庁の職員が毎週のように文科省に行って、下交渉をしています。とにかく今は通さなきゃいけない。通すためにはいろいろな要件を満たさなければいけないということなのです。ただ、大学というのは開設してから最初の卒業生を出す4年間は制度をいじれないのですが、4年目になりますと、いろんなものが届出に近いかたちで変更が可能になります。例えば学部学科を増やすとか、定員を増やすとかいうこともあるので、ぜひ総合戦略の中に4年後をどうするのかということをも私も学長として、開学と同時に学校内に長期ビジョンの検討委員会を作るつもりなので、そこを豊岡市さんと連携して、4年後、これ4年経ってからでは遅いので、もう4年経ったらすぐにでも届出をだせますので、それを含めて計画の中に入れていただいたほうがいいと思います。

例えばですけども、海外ではよくあるのですが、大学の下にランゲージスクール、語学学校を作る例もあって、日本語学校です。例えば1年か2年

の日本語学校をつくり、そこで1回留学生を受け入れて、いちばんいい層を大学に受け入れる。そうではない方たちも城崎で働けるようにする。そうすると、ビザとかが非常に取りやすくなります。こちらの学校を出ておきますと。それから、中国の大学で2年間日本語を勉強して、いちばん優秀な子たちをこちらによこす。これはダブルディグリーと言いますが、こちらで残り3・4年を過ごして、こっちの大学で卒業させる。これも非常にビザとかが取りやすくなります。今そういう協定を結ぶようなことも考えています。

もう1つ、前提としてお考えいただきたいのが、おそろくだいたい岡山大学とか鳥取大学と同じか、ちょっと上ぐらいの偏差値の大学になります。なので、当然その子たちは城崎で就職するにしても、それは幹部候補生として採っていただくということになるのだらうと思います。単純労働者ではないということをご理解いただきたいです。その子たちがどれだけ残るかということなので、そこをぜひ考えていただきたい。

それから、学生は今もう二極分化してしまっていて、すごく困難な家庭の学生もおります。なぜなら、公立大学というのは今いちばん学費が安いのです。国立大学は今80万円ぐらいですが、公立大学は50万円ぐらいです。特に県内ですと、さらに優遇措置があるので、だから来る、という学生がけっこうおります。オープンキャンパスをやっている、寮は1年だけですか、2年以降は残れないのですかとか、アルバイトはありますかという質問をすごく受けます。要するに経済的なことも考えて来るという、非常に優秀な親思いの学生がたくさんいます。例えば城崎の旅館等で、昔の新聞奨学生のように2年次から住み込みで、朝ちょっと働いたらあとは学校に行くみたいなことで受け入れていただいたりすると、定着率が高くなるかなと思っております。そういったことをこれからご支援いただく、考えていただくといいのではないかと思います。

もう一方で、演劇祭にも、この専門職大学の学生もボランティアに入りますが、全国からボランティアを募りますので、これも長い人は3ヶ月ぐらい豊岡に滞在しますので、当然地域と交流を持っていただきますので、そういったところも活かしていただけるといいかなと思います。事実関係としてはこんなところです。

ただ、やはり女子の学生はたぶん70~75%になると思いますので、この子たちが残るためには、ジェンダーギャップを解消してください。もうこれは学長としてのお願いです。女性の偏見が強いところに学生たちは残らないと思います。

座長

今の大学を卒業したら残るかどうか。たぶん専門職大学に来る学生たちは、

自分探しをするような学生ではないのではないかと思います。

委員C そうです。もうちょっと意識的な、逆に言うと、本当にそこに応えていた
 きたい。

座長 その意味では観光、それから、アートの分野はこれからどういう仕事ができ
 るのかということなのでしょうけれども、観光のほうは明らかに大学プロ
 グラムに入っているわけですね。そうすると、豊岡の観光からいくと、彼ら
 を受け入れて、いい労働力を受け入れて、さらによくしたいということなの
 でしょうけれども、彼ら、彼女たちの気を引くためには、行く価値がある観
 光産業に変わっていただかないと、もつともつと。あるいは、そういったこ
 とが可能として考えられるような動きが見えていないといけないという
 ことがあるので、今まで、かばんと観光を2大基盤産業として、市も積極的
 に支援してきたのですけれども、今のような視点を考えると、もつともつと
 それをレベルアップしなければいけないということが出てくるのではない
 かと思います。

 これらのことに関連してでもいいですし、それ以外でも何でも結構ですの
 で、いかがですか。

委員D まずジェンダーギャップのことです。前回の会議で婦人会の話の続報なの
 ですが、家に帰ると座布団カバーがたくさん山積みしてあったのです。「こ
 れ、どうしたんですか?」「会館の座布団だ」と。これを洗って、また返さ
 ないといけない。「クリーニングじゃダメなの?」「いや、慣習だからダメ」
 と。婦人会の仕事がまた仕事がなくなっちゃうから、ということなのですが、
 これは男女ギャップというよりも慣習でそうなってしまっていて、どこかで
 断ち切る術というか、チャンスをあげないと終わらないのかなという思いで
 感じておりました。それが良い悪いではなく、そういう流れできてしまっ
 ているところが1つあるのかなと思います。

 私も情報発信している1人の身として、家事に参加しようとやっているの
 ですけれども、妻には妻のやり方があって、食器とか洗うと怒られるんです。
 この辺でまたギャップが起こるのではないかなと。それが全家庭にあてはま
 るのかどうかかわからないですけれども、男性がやろうとしてもなかなかでき
 ないこともあるのではないかなという思いがありました。

 仕事柄、高校生にインタビューをするのですけれども、専門職大学に入り
 たいという高校2年生も出てきています。その子は、「とりあえず専門職大学

に入ろうかな」と言っていました。高校生との対話で 20 年携わっているのですが、やはり「交通が不便である」「買い物するところがない」とずっと言い続けています。インターネットが普及してきて、「インターネットでショッピングできるんじゃないの？」と言うと、高校生たちは、やはり歩きたい、出かけたいたいですね。出かけるところがないというイメージを持ったまま都会に行ってしまうと帰ってこないのではないかと思いました。交通の便も社会人になって免許を取れば、不便はないのでしょうかけれども、やはりそれがずっと印象に残っているとことが考えられるのではないかと思っています。その辺の解消に何か策が必要ではないかと思っています。

昨日、五荘小学校の運動会があったのですが、五荘小学校には 700 人の児童がいますので、500 人の出生数となれば、1 学年に 100 人ぐらいいますから、5 分の 1 くらい五荘小学校に集まっているという考え方もできるのかなと。人数が多いので、ふるさと教育をしても、それがちゃんと 1 人 1 人に響くのかどうかというところがすごく気になるところです。

先日、同窓会のゴルフコンペで、同級生が 120 人集まりました。7 : 3 くらいで 7 割が外に出ている人です。このゴルフコンペのためにライングループを実行委員会で作っていろいろと情報交換していたのですが、コンペが終わった後これを閉鎖するかどうかという話になったのですが、「いやいや、地元の情報がほしいから残してくれ」と。彼たちの息子、娘たちが就職したすんですね、そのときに孫ターンの可能性もあるのではないかと思いました。今後ライングループで地元の情報をうまく発信できるのではないかと思っています。ただ、そのラインに初めて載った記事が、今年、気比の浜海水浴場が海開きしませんでしたという、すごくネガティブな内容で、豊岡も人口減で困っているんですねという情報が行き交ったりしましたので、もう少し明るい話題にしないといけないのかなと、個人的に思っていました。

いろんなところにチャンスがあり、何が功を奏すかわからないですけども、細かく 1 つ 1 つクリアしていけば、いろんな結果につながると。たぶん、今は本当に熱量の高い人が豊岡に入ってきているのを実感しています。これも本当に 5 年前、10 年前から続けてきた成果が今表れているのではないかと思っていますので、本当にコツコツとそういうことをクリアにしていけば、豊岡に帰ってくる男性も女性も増えてくるのではないかと思っています。

それから、高校生の交通の便の不満として、バスや電車の利用の便をよくすることもあります。やはり自分たちで出かけたいたということもあると思うので、これは突拍子もない意見かもしれませんが、原付なども 1 つの選択肢として挙げてもいいのではないかと思っています。

委員E

関連はしていませんけれども、働きがいがあり働きやすい事業所、ジェンダーギャップの解消に関してですが、私は豊岡市のワークイノベーション推進会議の会長を仰せつかっておりまして、今、20社ぐらいが参加しております。中には本当にそれをしないと、とにかく人は来てくれないということで、経営者自ら率先して、取り組んでおられる某鞆メーカーさんもありますし、私のところも少しずつやっています。

先日、会員企業に対するアンケート調査がありました。いちばん最初は4社ぐらいしか受けなかったのですが、1回50,000円でできます。スマホで全部回答はできるもので、社員全員に対して、働きがいがある会社なのか、働きやすい会社なのかどうか、そういうことを年齢別・男女別・職種別で全項目答えていって、分析しているところです。ただ中身が全部に共通する分類になっているので、個々の企業には当てはまらない部分もありますけれども、いろいろ参考にはなったと思います。

その中で私のところもやって、ちょっとショックだったのが、3、4社ぐらいの中では、他社に比べて全体的な働きがい低いという結果が出ておりまして、またいろいろ考えていかなければならない部分があります。それと、男女で見えていくと、実は女性のほうがかなり働きがいを感じて、また、働きやすい企業であると答えてくれています。僕は逆に思っていたので、ちょっと意外でしたが、それはそれで非常に有難いことですし、今の方向性でいいのかなと思いました。しかし、質問の中に管理職になりたいかとか、もっと上を目指したいかという部分で、これは女性がものすごく低かった。男性はそれなりに書かれていますけれども、今このワークイノベーション推進会議の中でもいろんなセミナーをやっています。経営者向け、管理職向け、人事担当者向け、女性向けと、これでもかというぐらいセミナーをやったのですが、その中で、女性がもっと自分を高めていくとか、キャリアを積んでいきたいという意識が非常に、これはうちだけなのかちょっとわからないですが、豊岡、但馬の女性は少しそういう部分がおとなしいとか、奥ゆかしい部分があると思います。そういうこともセミナーなどを通じて高めていく必要があると感じております。

それから、専門職大学の件ですが、観光と芸術ということになりますので、人材も非常に期待をされているところも多いと思います。平田先生にお聞きしたいのですが、その他の産業、工業や製造業などの影響について、どういふことを我々は期待できるのでしょうか。もちろん、商業では学生や教職員が増えて家族が増えれば、飲食業や不動産などに影響があると思いますけれども、その他の産業の人は、どういふふうに応援していけばいいのか。もちろん、これは市を挙げて応援していくものですが、我々の関わり方を少し

教えていただければと思います。

委員C 大学の構成が1学年1学科なのですが、観光とパフォーマンスアーツで確かに2本の柱なのですが、授業の大きな部分はこの真ん中にあるマネジメントの授業になっています。その中に、いわゆる観光マネジメントとアートマネジメントという、専門的なものがある、これはそれぞれやるのですけれども、通常のマネージメントを学びます。それから、ICTの活用とか、プログラミングの授業も必修ですし、それから、英語も、入る時点から英語は相当高いレベルが要求されます。それから、希望者は中国語・韓国語を勉強する。例えば、豊岡のかばんをどういうふうに外国人観光客に売っていくとか、あるいは、外国にもっとPRしていくとか、そういうことも含めたデザインができるような学生を育てたいと思っております。そういうところで貢献できる可能性は十分あるのではないかと考えております。

それから、起業ですね。その授業がありますので、何人かは残って、学生時代から起業してくれる学生が出てきてくれないかなというふうに思っています。

委員F 先ほどの交通網の話なのですが、私は日高町に住んでおまして、今、娘が神戸に行っています。この夏も一度帰ってきたので、いろいろなところに遊びに行くのかなと思いましたが、ほぼ家にいるわけです。当然バスもあれば電車もありますけれども、時間が合わないようです。例えば、学生などがよく帰ってくる夏休み・冬休み・帰省シーズンに合わせた、タイアップではないですけれども、そういう時に限ってはバスをもっと頻繁に神鍋に行けるようにするとか、極端に言えば利益度外視で、そういう学生の足を確保してやるというようなことも、帰ってきやすい状況になるのではないかと考えます。当然、我々も日高に住んでいて、車がないと仕事もそうですが、何もできないと思うのですが、学生にしてみれば、免許があっても車を買えるようなお金もないですし、当然乗るような機会もそれほどないと思います。そういう子らが帰ってくるようなまちにするには、魅力あるまちづくりも大切ですが、交通網、交通手段の確保というのが学生向けに必要なのではないかと考えております。今、神戸に住んでおりますので、向こうの状況で言うと、朝から夜中まで電車でも何でも走っている状態で、好きなときに好きなところへ行けるという状況なので、その辺はやはり、同じということは難しいですが、田舎については、そういう考え方も必要なのではないかと考えました。

委員G 専門職大学ですけれども、FM ジャングルでは、あわよくばとちょっと期待してしまっていて、若い女の子、そのように限定してはいけないとは思いますが、若い世代の女の子がほしいんです。専門職大学ができて学生さんが来られたら、ちょっと興味を持っていただいて、発信力や話をまとめること、話を伝えることに興味を持ってくださる学生さんがおられたら、うちにもお手伝いに来ていただいたり、もしかしたら、うちに就職していただけるような、そんな状態になればいいなと思い、専門職大学が早く開校することを心待ちにしている状態です。

それから、移住・定住についてですが、今 FM ジャングルで、移住してくださった河合美智子さんの新番組を8月からスタートさせています。河合美智子さんたちが発信されていることもあり、全国から聴いていただいている状態です。以前からも静岡とか千葉とか九州方面から聴いてくださった方もたくさんおられるのですが、さらにそれが増えていることを実感している毎日です。ですので、発信する力というのは、何にしても大切なのではないかと日々感じています。これからも私たちのこの番組を続けていこうと思えますし、これをまた全国の方に聴いていただけるような何か手立てはないかと思ひ、手探りで今やっている状態です。こんなふうに関実に移住してきた方が「豊岡はこんなに面白いことがある」「こんなに素敵なことがある」というのを実際に発信されることは、すごく力があることだと思ひます。いかに豊岡がこんなふうに関いいことをしているよ、やっているよ、と前面に出していても、実際にそれを体験した人やそこで暮らしている人が「こんなに素晴らしいです」「ここが好きです」「これ面白い」などと発信していくことが、豊岡を知らない人にとっての情報源となり説得力になるのではないかと思ひます。これからもこの番組が長く続いていけるように、がんばっていきたいと思ひますし、豊岡市さんとまたそういう番組ができればと思ひます。

それから、情報発信についてですが、私は教育委員をさせていただいて、但馬内の各教育の仕組み等をいろいろ勉強させていただきましたし、兵庫県の教育も各地域の教育のことも知ることができました。本当にお世辞抜きで、豊岡市の教育は、兵庫県の中でトップレベルだと思ひます。私は中学生と小学生の子どもを育てていますけれども、豊岡でよかったと思ひます。英語教育やコミュニケーション教育、ふるさと教育、これらの子育てをされているお母さんたちにもっと響く発信をしていただいたら、豊岡で子育てをしたいと思ひ人が増えてくるのではないかと思ひますので、そういう発信をすることにも力を入れていただきたいと思ひます。

委員C 専門職大学は演劇部の子がいちばん来るのですけれども、放送部の子も結

構志願者が多くて、高校の放送部の全国大会に出ましたという子が志願者の中にいますので、ぜひ期待していただければと思います。

座長 まだ移り住む前から「豊岡に移住するといいいよ」といちばんにおっしゃったのは平田さんでして、その発信力はすごいと思いますね。河合美智子さんのことがありましたので、ひょっとすると、専門職大学にもそうそうたる先生方がお越しになりますから、その方々にも発信をしていただくということを意識したほうがいいかもしれないと思いました。

委員H まず交通の話がありましたけれども、確かに専門職大学に来られる方も交通の便で困るのではないかと考えていまして、レンタカーやカーシェアなどの制度を進めて、大学生の方が気楽に車に乗って移動できるようなシステムを作ってみてはどうかと思いました。

それから、中嶋先生の資料から見ると、9ページの女性で677人転入している中で、外国人の127人というのは、思ったより多いなと思いました。この方々はどういう方たちかなと思ったときに、専門職大学にやってくる女性たちとは全然違うタイプの方たちなのだろうと思うのです。そうすると、今まで豊岡にいなかったタイプの外国人や専門職大学に来られる、すごく意識の高い方とか、本当にすごいいろんな方が一気に豊岡に入ってくるけれども、それを豊岡のまちがゲットできるのかなというのが不安というか、もう少し私たち市民の意識を変えないと、本当にいろんな人がいて、当たり前だという意識を変えないと、この人たちは出ていってしまうだろうなと思います。

専門職大学ができるのはすごく楽しみなのですが、専門職大学に他の学生も遊びに行ける、演劇の練習などを見にいけるとか、まちの人たちも楽しみにそこに足を運べるようなスペースになればいいなと思います。お店やレストランなど若い人たちがいっぱい集まるようなお店がその中にできれば嬉しいなと思います。

最後に、気比の浜の話がちょっと出ましたが、気比の浜の人と話をする機会がありまして、今年は浜を管理する人たちの手が足りなくて、海開きをしなかったそうです。海開きをするということは駐車場の管理をする人手を集めないといけないということです。結局それができなかったのが海開きをしなかったけれども、公園のままだったので、水上スキーやキャンプをしたい人たちですごく賑わったらしいのです。どこからかあそこはタダで車をとめてキャンプができて、水上スキーも禁止になっていないという情報が回っていて、日本全国から集まってきたという話を聞きましたので、それも1つの方向かなと。水上スキーをするというのは危ない面もありますので、ちゃん

と決まりを作らないといけない部分もあると思いますけれども、そういう私たちの使い方というのものもあるのかなと思います。

委員 I

専門職大学を卒業した後の未来として、どんな仕事があるのか先生に伺いたいと思っていましたので、先ほどお話しいただいて、納得しました。それから、これは先ほどもおっしゃいましたが、専門職大学が豊岡や但馬の高齢者などの地域の方の向学心を満たす場所であればいいなと思いました。

子育て支援に来られる方には、転勤族の方がおられます。その転勤族の方に、豊岡がよりよいまちになるために何か外から見た意見をくださいと言ったときの1つに、神戸から電車でやってきて、豊岡の駅に到着する前にある場所、現在専門職大学を建設中の場所ですが、そこが幽霊のような感じになっていたのが非常に豊岡の印象を悪くしておっしゃっていました。その場所が、大学というだけではなくて、何か豊岡の未来を表現するような場所になるのではないかと思います。特に豊岡に初めて来られる人にとっては、顔の部分がどのように映るかというのは大きいと思いました。

それから、豊岡市内で子育て講座を開講しているのですが、びっくりするぐらい但東のお母さんは元気がいいです。今日のこの資料にもありますが、女性が生き生きとして、というのがまさに但東のお母さんがそうだと感じました。講座に参加している但東のお母さんたちは3人、4人のお子さんを育てておられます。1人、また1人子どもが生まれる度に、母として生き生きする力強さがあります。子どもさんの多さや、あるいは、周りも子どもさんが多いことに関係するのではないかと感じています。

ジェンダーギャップのことですけれども、在宅のお母さんたちを中心に見た場合に、私は女性の意識というのは、かなり高まりつつあると思います。子どもが増える度に、子育てに対しても、自分のことに対しても、勉強したいと思ったり、そういう機会を自分たちで作っていったり、集まりを作ったり、自分たちも何か支えられるようなことがあったらということがあり、そういうお母さんたちの話は、本当に活気があります。一方で、あまり変わらないと思うのが男性の意識です。お父さん向けの講座も10何年前からしているのですが、7、8年前から「僕もがんばっているつもりだけれども、どうして奥さんに理解してもらえないのだろう」とか、「僕はこれもやって、あれもやって、これもやっているのだけど、どうも僕のやり方が気に入らないみたいで、僕に直接言ってくれない」と言われるようになってきました。実は、お母さんたちの講座も最初の頃は、お父さんの講座と同じようなことが多かったのです。しかし、今では、お母さんたちは子どものため、自分のため、自分と子どもはセットで考えていきたいという気持ちがあって、子育て

てを考えることは、自分も高まることだという意識が強くなってきています。これは、仕事を中心となっているお父さんとの環境の違いが大きいのだと思っています。お父さんが悪いとか、お母さんがどうこうと言うのではなくて男性と女性では育児の環境や子育ての環境、男性の考え方、女性の考え方もあるので、それをこれからどうしていくのかだと思います。お父さんがお母さんのように、子育てを考えることは自分も高まることだというような意識の変化がお母さんに行き、子育てがよい環境につながっていくのではないかと考えています。

委員 J 私、家事は最近ほとんどしておらず、息子が 90%ぐらいしてくれるようになっていきます。先ほどの話で、妻に認められるからとかではなくて、男性・女性に限らず、家事とか育児の経験とかスキルは、仕事にもいろんな面で活きると思います。家庭内でうまくいくスキルというのは、絶対仕事に活きると思うので、何かそういうふうを持って行って、皆がシェアできるようになってもいいのかなと思いました。

私も教育を核にしたまちづくりを本当にできたらいいなと、昔から思っていましたけれども、本当にそれがこんなに素晴らしいかたちで実現しつつあり、本当に期待できるなと思っています。今話しているような突き抜ける人材とか、幹部候補とか、そういう人材ではないと思いますけれども、都会でしんどい思いをして暮らしたり働いたりしている方に、こんな生活もあるよなど、何かそういう呼びかけというか、環境を作ってあげて、こっちで働こうかということにつながる場合もあると思います。例えば保育とか介護とか、圧倒的に人が足りないような場面はどうでしょうか。うちにも 1 人フラッと来ている方がいます。1 年ぐらい続いているのですけれども、安い家があって、お給料は少ないけれども、そこそこ仕事にやりがいがあるって、生活もお金がかからなくて、車も好きに使ってと、けっこう楽しそうに暮らしています。そんな中で出会いがあってというパターンもあるかもしれないし、若い夫婦などは、職場の環境もですが、住むための環境整備など、楽に暮らせるようにする方法もありなのではないかと思っています。

それから、息子がバスや電車で移動するのですが、午後 1 時半とか 1 時ぐらいの思う時間にはバスも電車もなくて不便なので、何とかなればいいなと思っています。私は大阪から来ましたが、車に乗るようになったら車のほうが便利で、もう都会に出るのは面倒になっています。公共交通とは別に、気軽に乗れる車があれば、けっこう便利なのではないかと思っています。

座長 いろいろとありがとうございます。この組織がやろうとしているのは、地

方創生戦略ということで、人口の減少の緩和に役立つのかどうかという議論もしないといけないわけです。その中で、フリーターであるとか、自分探しの人だとか、来ている派遣の女性たち、先ほどのお話は、たまたまやってきて、いろんな配慮をされ、うまくいきましたという例でしょうけれども、それを戦略として活かすときに、どういうことをすればいいのか、もし、アイデアがあればお聞かせいただきたいですし、まだないということであれば、どうすればできるかについて少しお考えをまとめていただければと思います。

それから、専門職大学が数的に非常に可能性が高いという中嶋先生のお話がありました。また、今日お話した中でも、平田さんからお話がありましたように、専門職大学を十分活かすようなかたちまでできていませんので、ここは膨らます必要があるかなど。例えば、日本語学校の話がありましたけれども、ねらい目はねらい目だと思うんですね。一方で、語学学校は、相当ひどい運営のものがあって、社会的な問題にもなりかねないところがありますから、やりようを考えるとそれはあると思いますけれども、そういうアイデアがあったり、それから、学生たちが終わった後、本当に城崎に残ってくれるかというのは、逆に今度は、では観光をどういうふうにしていくのかということについても、まだ十分議論できていませんので、今後さらに議論を深めていきたいというふうに思います。

それから、交通の話があって、みんなもっともだと思います。もっともだと思いますけれども、それが人口減少の対策に役立つか。神戸とか東京のあの便利さと比べて、高速道路ができて、バスが増えたからといって、できるか。もちろん、利便性を高めるということはすごく大切なことです。それは行政の政策としては重要なのですけれども、子どもたちが帰ってくるということを議論するときに、そこは本当にポイントかということも考えていく必要があると思います。隠岐の島の海士町でしたか、「ないものはない」と名刺にも書いてありますね。はなからそういうところで勝負していないという、まさにここに暮らす価値がここにあるということを前面に打ち出して成功しているまちもあると考えると、これからいろんなことをさらに盛り込んでいきたいと思うのです。ぜひそういう視点から見たときにどうなのかについても、ご意見を賜りたいと思います。

それから他のことになりますが、今豊岡市は若手の男性職員全員、育児休業を取らせるようにしているのですけれども、その辞令交付の中に、夫がやればやるほど、妻の意に添わないことは、往々にしてあります。それはコミュニケーション不足なので、やってほしいことを具体的に妻に書いてもらうといいでしょうと、以前の意見を聞いて言っています。その程度のことがい

っぱいあると思うのです。今日の議論の中でまだ出てきていないことがあります。冒頭に申し上げましたけれども、どうも女性のところは大問題というのが数字は明らかであって、帰ってこないことの理由の最大の理由の一つとして、ジェンダーギャップがあるかもしれないので、ジェンダーギャップの解消を取り組まないといけないのですが、女性を取り戻す手段として、ジェンダーギャップの解消だけでいいのか、この結果が出るのはかなり時間がかかるわけです。そうすると、女性を取り戻すこと、入ってきてもらうということの手段として、他にもないのかということについて、何かご意見を賜ればと思います。

委員B 派遣などのケースはもう少し仕組みとしてこちらも考えておきたいと思っています。ジェンダーギャップの話がよく出てくるのですが、非常に重要なことだと思います。実は、私は、男性から見た女性だけではないと思っています。女性同士の中でもたぶん似たことがあるのではないかと考えています。僕は城崎に来ましたけれども、豊岡の知り合いの方がたくさんできて、おかげですごく気分転換というか、救われたところがたくさんあります。ジェンダーギャップの解消は、そんなに簡単ではないと思います。やらないとダメなのですが、たぶん時間はすごくかかるだろうと。それを考えると、2つのコミュニティという言い方がいいのかわからないけれども、自分の世界だけで言うと、すごく狭い世界にいて、いやな人とか、すごく大変だとか思うのですが、もう1つのコミュニティにうまく属すると、そんな人ばかりじゃないとか、自分に合う人もいるのだなどと思うことで救われることもたくさんあるのではないかと考えています。UI ターンで女性がこちらに移ってくることもそうなのですが、何かその隣保の奥さん連中だとか、1つの雰囲気だけではどうしても絶対閉塞感がどこかで出てくる。だから、その時に趣味の世界でもいいし、仕事の世界でもいいし、何でもいいけど、もう1つちょっと息抜きというか、違う世界があるというのは実はすごく重要なのではないかと考えています。たぶん青年団の方が日高に移り住んだりすると、たぶん日高のまちはすごく変わると思います。それは意識されなくても、日高の人と一緒に住まれていると、こんな生き方があるのか、今まで何か自分の生き方がどうも見えてこなかったけど、そういう人を見て、初めてこういう生き方もあるのだと思う人がきつとたくさんおられる。城崎の場合は、有難いことに、もう本当に毎日外国人が来られて、僕らも毎日外国人と接していると、常に今までの接客ってどうだったのだろう、今までの城崎のコミュニティはどうだったのだろうと、放っておいてもそう考えるのです。

大学ができたり、青年団の方が来られたり、インバウンドのお客さんが増

えてきたり、いろいろと地域が変わろうとしているので、いかにその変化をうまくみんなで感じとり、今の1つのコミュニティだけではないのだというところの視野を広げてもらうことができれば、定着してくれる、定住してくれる人が増えるのではないかと思います。

副座長

ジェンダーギャップの解消は、相当難しいと思います。改善の仕方も難しいですし、そのことを視覚化するのも、そのことを外部に認知してもらうのも相当難しいと思います。育児休業取得率とか、代表的な指標があるのですが、けれども、ほぼすべからずかなり表面的なもので、本質的には、そんな指標がよくなったところで、それほど働き方が変わっていないことは、すごくたくさんあって、もう少しその辺を、ましてや大きなまちではそういうことが比較的指標化が進んでいるけれども、こういった小さな自治体になると、ほとんどそんなことは統計としてできないということになります。先ほど地元の経営者の方々のアンケートの話がありましたけれども、相対的に見て、自分の業界とか自分の給与がどれぐらいいいのか悪いのかとか、進捗があるのかないのかは、意外と経営者の方も把握しておられない、実感として理解しておられないということもあると思います。このあたりは、真剣にやるためには多少あめと鞭になるようなかたちで、しっかり測ったり、いい企業は具体的ないいことを集めながら、外に向けて具体的に発信することに力を入れていくべきだろうと思います。自助努力みたいところでやってしまうと、いつまでたってもできないので、かなりシステムティックに、すごく積極的にやる必要があると思います。

それをやりつつ、市長も市役所の中で男性職員の育児休業を取るようとおっしゃっていましたが、簡単に取れ取れと言っちゃうとダメなのです。同時に必ずやっておかないといけないことがあって、それは男女間の所得水準の格差を解消しておかないといけません。育児休業取得中というのは67%の給付になっていますので、男性が強烈に稼いでいて、女性の稼ぎが非常に低いという夫婦がいて、男性が育児休業を取っちゃうと家計的に収入が激減しちゃうわけです。どう考えても合理的に考えれば、男性が仕事を続けてくれているほうが夫婦としての稼ぎが継続されるわけです。取れ取れと言っていると、家計の収入が激減してしまう。ですので、男性に取ることを勧めつつも、女性も男性のように稼げるような環境にしておいてやらないと、取ることによって効果は出ますが副作用が出ますから、そっちへいってしまうような懸念もあるかなと思います。ですので、ジェンダーギャップを解消しつつ、安定した働き方ができて、そこそこ男女に関わりなく安定的に稼げる。欲張りを言えば、なおかつやりがいがあるってと、こういうものは働く環境と家庭

とのつながりと、1つ1つパーツがそろってくるようなかたちでの実現が望ましいのかなと思います。

座長 ジェンダーギャップ解消の担当者がいるので、何か発言は。

ワークイノベーション推進室職員

女性にも働きがいがあって、働きやすい事業所の表彰制度を検討しています。来年からこの表彰制度を始めます。副座長がおっしゃるように、一定の水準を持たすことは必要ですけれども、この事業所のどこがいいのかというのを明確にして、表彰したいと思っています。制度づくりも佳境に入っていて、今日も午前中に協議をしていました。アンケートは、その前段階として、自社の強みと弱みを知っていただくためのものです。女性の働きがい・働きやすさという観点から、企業の良さを見せていって、あの会社もあの会社も頑張っているのだから、わが社も頑張ろうという流れ、そして、表彰されることによって、例えば人が採れるという具体的なメリットを生みながら、女性にも男性にも働き続けたいと思われる事業所を増やしていきたいと考えております。

座長 豊岡市役所の男性職員の育休というのは、最低2週間と言っています。2週間だけなら給料、育休の手当とではぼトントンになります。今実際、市役所で取っている人が3人いますけれども、2人は2週間、1人は3週間。あとは夫婦環境をどこまで重視するかによって、収入が多少減ったとしても、最後退職するまでのトータルの話です。とにかくスタートするということ。こういった動きを受けて、中田工芸というハンガーの会社の若い社長は1カ月の育休を取りました。これは、職員に対するメッセージとして非常に有効になってきて、こういった例があちらこちらに出てくると、日本人はとにかく皆さんやっておられますよというのが大好きですから、そういう雰囲気はどこかから手をつけていこうということでやりました。育休の場合には、早くからわかりますので、職場には早くからそのことを共有してもらって、その期間いなかったとしても仕事は回るように段取りをつけていく。それはそのまま働き方改革につながるのですけれども、そういったことを始めているというのがあります。

それから、男女の収入のギャップというのは、もう明らかに男性で50代は480万平均、女性は250万、その最大の理由は、女性はパートが圧倒的に多いことが背景にあったり、あるいは、経営幹部には男性がほとんどだということがあったりするのですけれども、ここを変えていくために、今人手不

足の中で、男性とか女性とか言っていられないでしょうと。そのときに、このジェンダーギャップは課題ですよねということを経営の側に働きかけをしていく。それから、すでに家庭に入っている女性たちはなかなか外に出ることができない。出たいけれども、自信がないということがありますので、そこを後押しするようなことも始めるため、プチ勤務として、短い時間、期間でもいいので、とにかく始めてみましょうとか、あるいは、在宅で勤務ができるような企業も豊岡に入ってきていただいて始めるなど、事態を動かしていこうとする取り組みとしては始まっています。そして、その一環で、共感していただいた 20 の企業と豊岡市がグループを作って切磋琢磨している状況です。

委員 I 最近、ある看護師のお母さんから、仕事を辞めようとしているけど、私はどうしたらいいのだろうと相談がありました。その方は夜勤もあり、子どもさんは小学校に上がるし、保育園の送り迎え、ご主人にも夜勤があるので、結局は母親のほうが辞めることになりました。そのお母さんは看護師の仕事を生き生きとされているので「あなたはこの仕事、好きなんでしょう」と言うと、「すごく好き。だけど子どものことを考えたら、どうしても選択しないとダメなので」と言われました。これは別に豊岡市だからではなく、どこに住んでいてもこの問題は起きることだと思いました。そのお母さんに、去年からお聞きしているプチ勤務のお話をすると、病院は辞めるけれども、また少しずつがんばってみますとおっしゃっていました。また、あるプチ勤務で今年採用になったお母さんが、子どもがまだ小さいので度々休みを取らなければならない。でも、おかげさまで企業は理解があるので休むことに罪悪感を持たずに、安心して休むことができる。今の職場でこのまま何年か勤めて、いずれはフルタイムで働きたいとおっしゃっていました。

豊岡市はこんなふうにお母さんたちを応援していることをもっと PR してほしい。遠慮なく休めて、仕事も続けられるということをお母さんたちにアピールして、継続的に支援していただきたいと思います。その意味で、先ほどの表彰の話はすごく嬉しく思いました。

委員 A 育休の話なのですが、今豊岡市で育休を取っておられるのは、産後すぐですか。

座長 人それぞれで、産後すぐもありますし、1月ぐらい経ってからとか、1年以内なら手当が出ますので、そこは本人の希望です。

委員A 私の経験上、出産後1ヶ月って、髪を振り乱して、主人にも見せたくないような格好で家の中にいるので、逆に主人が休んで家にいたら仕事が増えるなという気がします。そこは奥さんの意見を尊重して、育休を取るタイミングを考える。だんだん2、3ヶ月ぐらいから体が動くようになるので、そうすると社会と切り離されていることに不安を感じ出すのです。母性と社会の間でちょっと揺れ出した時期に、主人が育休を取ってくれて、1日2時間働きにいって来るというのがあれば、すごく気分よく日々を過ごせるのではないかと思います。その辺のタイミングも豊岡市として落とし込んであげて、指針を示してあげればお母さんの安心につながるのではないかと思います。主人が家にいることによって、自分だったら適当でいいのに、ご飯を作らないといけないというのは絶対あると思うので、そこを何か示してくれると、ちょっと嬉しいし面白いなと思いました。

副座長 制度的には、産前産後4週間ずつあって、それはお母さんが医療保険からの所得保障を得て休みを取ることなので、赤ちゃんが1ヶ月になったところから、お父さん、お母さん両方に権利ができて、そこからは失業保険のほうに担当が変わって、先ほど言っていました67%の所得保障を得ながら、休みが、赤ちゃんが1歳になるまで、12か月までということ。ちょっとだけエクストラがありまして、お父さん、お母さん両方取った場合には1ヶ月延長できる。13ヶ月まで取れます、そういう制度になっています。今おっしゃったように、産後に一般的なのは、里に帰るかお母さんがお姉さんなり妹なりを呼び寄せるとというのが、産後は最も一般的。でもやっぱり男性がいてもねというのは、どこも一緒みたいです。夫婦で話し合っどどのタイミングでどれくらいの期間にするのか。ヨーロッパで推奨しているのは、お父さんとお母さんと交代を必ず1回させるようにという、それを義務づけている国や、交代した場合にもっとベネフィットがついてくる、もっとたくさん支給してもらって、もっと長く休めるとか、そういうことをセットで言って、取るのは当たり前、それから、交代するのも当たり前ということを浸透させようとしてきています。

委員D 豊岡市で英語遊び保育が始まって4年目ですけども、やっと公立園で英語遊びをする視察先が見つかりまして、見にいきました。ズバリ言うと、豊岡市のほうがレベルが高かったという結果で終わりました。既存の会社があって、女性が活躍するというのは1つですけども、例えば女性が活躍できる会社をどんどん起業、クリエイトできるような環境を豊岡市でできるのではないかと。まず保育士さんというのは日本全国でほとんどが女性であると

思いますので、1つの例として、英語遊びを実践する保育士さんが研修するセンターが豊岡にできれば、すごく女性活躍の場が広がるなど実感しました。そのような下地がどんどんできてきていることも豊岡市の強みですので、それを今後活かしていくことは、1つの女性活躍の場の創出につながるのではないかと思います。

今度、大阪に行って、Iターン者を呼び込んでくるイベントに、英語遊びをPRしたいということで、私も行くことになったのですが、本当にいいものがたくさんありますので、どんどん豊岡での活動をPRさせていただくことも1つですし、いずれビジネスにつながることもあるのではないかと思います。

座長 そろそろ時間が迫ってまいりましたが、最後に何かあればどうぞ。

委員E ワークイノベーション推進会議の件です。今、表彰制度を考えているということで、それはそれでいいですし、そういう企業をどんどん増やしていくべきだと思いますけれども、ただ、ワークイノベーションで言っている、女性の働きがいがあるとか、働きやすいなどというのは、必要最低限のファーストステップなので、これだけで本当に若い女性がみんな帰ってくるかと言えば、なかなかそうではないと思います。やはり、大企業みたいにブランド力にはかなわないですけれども、地域でもものすごく突き抜けた技術を持っていたり、ある分野でもものすごく世界的に有名だったりする企業は豊岡にもいくつかあります。そういったところをもっと支援して、それをまたPRしていかないと、都会に行けば、我々がやっているような働きがい、働きやすさ、子育て支援などは当たり前の話になってくるので、またその先を見据えたかたちで企業育成をやっていかないといけないと思います。今、「おっとりっし豊岡のものづくり」、ふるさと教育、県の「トライやるウィーク」、そして、但馬の「夢但馬産業フェア」等々、子どもたち、中学生・高校生に豊岡や但馬の企業を知らせる事業がいろいろとあります。それぞれが目的を持っているとあるのですけれども、なかなか統一したようなかたちで、小学生・中学生・高校生、段階的にもっと但馬の企業、豊岡の企業をPRする、そういうところは女性にとっても働きやすいところだという、それをPRができるようなことができないものか。

それからもう1つ、環境問題もそうです。今国連で環境問題をやっていきます。若い人はものすごく環境に対して敏感になっているし、興味も持っている。そういう環境問題に非常に取り組んでいる、理解している企業であれば行きたいなという子もいるかもしれないし、そういう切り口でも豊岡市の企

業を評価して、表彰するなど、売り込むようなことも必要ではないかと思っております。

座長

今日いただいた議論を踏まえながら、さらに事務局で素案をさらに案としてまとめていきたいと思ひますし、ぜひ委員の皆さんからも、具体的に何かありましたら、事務局のほうにお寄せいただきたいと思います。

冒頭の中嶋先生の分析にありましたように、非常に厳しいと。東京と豊岡の間には確かに直接の移動はそんなにはないのですが、おそらく阪神間に行った女性たちが大学を卒業するときに、大阪に取られ、あるいは、東京に取られというかたちで、三角の移動で取られているのではないかと。どちらにしても、大都市に暮らす価値と豊岡に暮らす価値が比較されたときに、私たちは勝てていないということです。非常に強い危機感を持って、この対応をしっかりとやっていきたいと思ひています。前回も今回もジェンダーギャップの問題がかなり重要だということも、改めて確認されたところですので、そこに何かさらに効果的なものがないかどうか、しっかりとやっていきたいと思ひますし、専門職大学の可能性をもっと活かすような方策についても考えていきたいと思ひます。そこはまた平田さんから個別にいろいろとご指導を賜ればと思ひます。